歴史的まちなみ景観の整備における場所的特性への専門性を有した関係者の認識と意匠変容に関する考察

- 三重県亀山市関宿伝統的建造物群保存地区を事例として -

Study on the perception of experts about the characteristics of place and the transition of traditional design in historical landscape

:Case study on the Seki-juku Important Preservation District for Groups of Historic Buildings

倉田英司*

Eiji Kurata

The purpose of this study is to clarify the effectiveness to utilize the characteristics of “place” in historical landscape. The Seki-juku Preservation District is divided into respective sub-zones based on the survey conducted in 1980 to review characteristics of the area to establish the preservation district. The municipality manage them referring to the preservation plan that illustrates characteristics of respective sub-zones. We compare the states before the designation as the preservation district and at the present using pictures taken in the 1980 survey and documents stored in the municipality. Second, we analyze the perception of experts about the characteristics of “place”. Finally, we discuss the effectiveness on characteristics of “place” that might be caused by the perception.

Keywords: characteristics of place, important preservation district for groups of historic buildings, historical landscape, restoration, traditional design,

場所的特性, 重要伝統的建造物群保存地区, 歴史的まちなみ景観, 修理, 伝統的意匠

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

現在では、全国各地で歴史的まちなみ景観の整備を行う地区を見ることが出来るようになった。整備を進める上で、行政を主体として決定された範囲内の規制や誘導について具体的な内容を検討する際、整備を進める地区が有する特性を十分に把握することが必要である。地区の中をみると地区内を一括りとした全体での特性だけでなく、地理的条件や歴史的経緯によって、建造物単体だけではなく地区全体で同様の特性とは言い切れない、地区内の細かな範囲ごとの異なった特性（場所的特性）がみられる。歴史的まちなみ景観の整備の中でも、厳密な制度のもと文化財としての保存も含め整備を進めている伝統的建造物群保存地区（以下、「伝建地区」）では、地区決定前に保存対策調査が行われており、地区内の細かな範囲ごとの場所的特性が把握されている。また規制・誘導の内容について定めている保存計画の中でも、場所的特性について記述がされている地区もみられる¹⁾。

しかし歴史的まちなみ景観の整備を行う地区において、場所的特性について対策調査報告書や保存計画などで記述がされていても、実際に行う整備内容について具体的な提案や決定を行うのは、行政や業者などの専門性を有した関係者であり、これらの関係者による場所的特性への認識の状況が、整備内容にも反映されることが想定される。

本研究では、歴史的まちなみ景観の整備において、専門性を有した関係者による場所的特性に関する認識の状況によって、歴史的まちなみ景観はどのように変容するのか、明らかとすることを目的とする。

1.2 研究の位置づけ

歴史的まちなみ景観の整備に関しては、伝建地区における修理・修景基準とその運用について建造物のオーセンティシティから課題を指摘している研究²⁾や、伝建制度と歴史的まちなみ景観の変容について地区内で多く用いられている意匠を事例に検証している研究³⁾など、建造物や地区全体の有する特性に着目した研究が行われている。

本研究では、「建造物としての固有性」、「地区全体の特性」両面の性格を有する「場所的特性」への専門性を有した関係者の認識と、歴史的まちなみ景観の変容について検討を行った。

2. 対象地区の概要

対象地区として、伝建地区対策調査等により把握した、地区内で区域分けを行った範囲ごとの場所的特性について、専門性を有した関係者間においても一定の認識を持ちながら整備を進めている三重県亀山市関宿で調査を行った。関宿は東海道47番目の宿場町であり、東海道の難所として知られる鈴鹿峠の伊勢国側の重要な峠下集落として発展した。

国による重要伝統的建造物保存地区の選定を国内で20番目と比較的初期の段階で受けており、1981年の保存計画の制定後、修理や修景を継続して行っていることから、長期間にわたる地区での変容状況を把握することが可能である。関宿の伝建地区の範囲は、東海道を基軸として東西約1.8km、約400件の建造物で構成されており、同一の地区内であっても特性の違いが生じやすい地区といえる。

3. 調査方法

本研究では、『関宿伝統的建造物群保存地区調査報告』(1981)³⁾、『東海道五十三次関宿重伝建選定30周年記念誌』

(2015)⁴⁾に記載されている関宿町並み全体の連続写真等を用いて、修理・修景事業の開始前(1980年)～現在(2017年)までの全建造物の変容状況の把握を行い、それらと市役所に保管されている修理・修景補助金申請書類等との照らし合わせを行った。また必要に応じ、市役所職員(技術職の方や文化財担当)などの行政関係者や、大工、工務店、建具屋等の業者、修理や修景を行った施主等へのヒアリングを行った。

4. 関宿の伝統的建造物群を形成する各区域とその概要

関宿の伝統的建造物群について、伝建地区の保存対策調査報告の中では、図1のように主に東海道沿いの木崎、中町、新所東、新所西²⁾と、瑞光寺などの寺院を中心に発展した北裏の5区域に分けて記述がされており、保存計画においても、区域ごとに特性や整備方針等が示されている。北裏については保存計画や修景の基準設定等、また修理・修景を進める上での行政や住民の意識も大きく異なっていることから、北裏を除く東海道沿いの4区域を対象に本研究では検討を行った。

保存対策に記載されている4区域の特性の中でも、歴史的まちなみ景観の変容に影響を与えと考えられる各区域の建造物の特性について把握するため、伝統的建造物(以下、伝建物)として特定されている建造物³⁾の割合(図2)、建造物の建造年度(図3)、建造物の利用方法(図4)の3点から検討を行った。1980年時点(修理・修景事業前)では、4区域は中町・新所東の2区域、新所西・木崎の2区域がそれぞれ類似する特性を持っていた。具体的には、中町・新所東は伝建物の割合が約60～70%と非伝建物の割合より高く、江戸～明治期に建造された建造物(関宿で最も古い期間に建造された建造物)が半数以上を占めていた。また利用方法では、店舗(商店等)が半数程度で見られ、以前は関町役場も存在していたなど関宿の中心的地域といえる。

図2 各区域の伝建物・非伝建物の割合(1980年時点)

図3 各区域の建造物建造年度(1980年時点)

図4 各区域の建造物利用方法(1980年時点)

図1 関宿4区域における伝統的建造物(伝建物)の分布状況

一方、新所西や木崎は、非伝建物と伝建物の割合が同程度または非伝建物の割合の方が多く、建造年度の浅い建造物や専用住宅として利用されている建造物も多くみられた。

1980 年時点で中町や新所東の多くを占めていた店舗は、その後専用住宅へと変化しており、2017 年現在では中町・新所東ともに店舗の割合は約30%程度に減少し、専用住宅は約70%程度となっている。

5. 修理による意匠の変容と場所的特性

5.1 意匠の選択と場所的特性の関係性

歴史的まちなみ景観の整備では、修理・修景による個々の建造物の個別更新や、防災設備の整備、無電柱化などの道路の整備が主な事業として進められている。修理・修景による建造物の個別更新は、歴史的まちなみ景観の変容だけでなく、施主の生活にも大きな影響を与える。関宿内では1980年から2017年の間に206件（関宿の全建造物の約59%にあたる）の建造物で修理・修景が実施⁴⁾されている。本研究では、建造物の個別更新の中でも、修理による復原が多く行われ、変容が著しい建造物の意匠⁵⁾を事例として検討を行った。伝建制度では修理によって意匠の復原を行う際には、建造物の固有性を判断材料としている。一方で、修景時の新たな意匠取り付け時には、修理による復原意匠なども参考とした周辺環境との調和に考慮して変更案が作成されており、関宿内では伝建物の修理における意匠の復原の傾向が、伝建物以外の建造物の修景による意匠の新たな取り付けの傾向とほぼ同様であった。しかし意匠の新たな取り付けを行う要因は、修理と修景で大きく異なる⁶⁾。

意匠の復原の有無や復原する意匠の種類、意匠の様式への決定など、修理によって意匠が復原されるまでのプロセスをヒアリング調査からまとめたものが図5である。施主による改修相談から始まり、行政等による建物調査や現状把握が行われるところまでは、ほとんどの意匠において同様である。次に痕跡調査や保存資料等から、過去の状況がわかる意匠については、これらの復原を含む修理案の設計が行政や業者によって行われた後、最終的な修理変更案の内容決定において、施主の意見が取り入れられる。一方で痕跡調査や保存資料等からの復原判断が難しい場合、行政や業者等だけでなく施主も含めた各者の意向を取り入れている。建造物の固有性からの判断が難しい意匠において、地区全体としての特性を当てはめるのでは幅が広すぎる場合、両者の中間に値する場所的特性が大きな意味を持つといえる。これらを踏まえ、伝建物の修理時における意匠の復原に関する各選択とその結果について、次節以降考察を行った。

図5 修理時の意匠復原のプロセス

5.2 修理による意匠の復原状況

関宿内での意匠の復原傾向を把握するため、対策調査報告や保存計画等から、伝建物の特徴的な10の意匠（図6）を抽出し、伝建物の修理による復原の実施割合⁸⁾を事例に分析を行った。調査を行った10の意匠の中でも、伝建物において、2階格子戸の復原が約32%（修理が実施された（2階建て以上の）伝建物87件中28件）、また1階玄関格子戸、平格子・出格子や腰板の復原が約40～80%（修理が実施された伝建物128件中49～82件）で実施されている（図7）。玄関格子戸、平格子・出格子や腰板の復原は、関宿全体での歴史的まちなみ景観変容の大きな要因の一つであるといえる。

図6 今回調査を行った関宿の伝統的建造物の10意匠

図7 修理によって復原された意匠の割合 (%)

6. 関宿内4区域における意匠の変容と場所的特性

修理により多く復元が行われた各格子（玄関格子戸、平格子・出格子等）は、多くの場合建具として用いられていた。これらの建具は基本的に取り外し可能であり、1980年時点で、ほとんどが取り外されていたものと考えられる。

図5の修理時の復元意匠を決定するプロセスの中で、各格子（建具）の痕跡は、建具を入れ込む際のほぞ穴や溝などに限られる。これらの痕跡からは、何らかの建具が入っていたことの確認は出来るが、実際の意匠の内容やその様式まで判断することは難しい。これは腰板も同様である。

これらの意匠は、修理・修景前には関宿内の区域ごとに多く取り付けられている意匠の様式が異なっていた。しかし伝建地区の対策調査や保存計画において、区域ごとの意匠の様式の違いは各格子、腰板ともに具体的には示されていない。行政や各業者へ行ったヒアリング調査（表1）では、腰板の様式について「（具体的なルール等を設けて厳密に）区域ごとに意匠の復元様式等を決定しているわけではないが、区域ごとの意匠様式の違いについては認識⁹⁾を持っていた」ことが確認された（表2）。しかし玄関格子戸、平格子・出格子などの各格子においては、場所的特性への認識¹⁰⁾を確認することは出来なかった。

行政や業者などの専門性を有した関係者において、場所的特性の認識が異なっている、各格子（玄関格子戸、平格子・出格子等）と腰板を事例として、修理による復元時の意匠様式に関する選択の状況について、次章以降検証を行った。

表1 ヒアリング調査の概要

項目	内容
調査対象	・亀山市市民文化課職員(2名) ・地元建築事務所(1級建築士1名) ・地元建具店(1級技能士1名)
調査方法	対面による聞き取り調査
調査期間	2017年5月～2018年1月
調査内容	・（復元根拠に乏しい）意匠の復元内容提案の状況 ・区域ごとの意匠様式の特性に関する認識の状況

表2（復元根拠に乏しい）意匠の復元内容の提案と場所的特性への認識に関するヒアリング結果

質問内容	（復元根拠に乏しい）意匠の復元内容提案の状況		区域ごとの意匠様式の特性に関する認識の状況	
	意匠の復元内容を提案したことがある	意匠様式の違いについてルール等の設定		区域ごとの意匠様式の違いについての認識
		格子	腰板	
行政	○	×	×	×
建築事務所	×	—	—	×
建具店	○	×	×	×
凡例	○=行ったことがある ×=行ったことがない	○=設定している ×=設定していない	○=おおよそ把握（認識）している ×=ほとんど把握（認識）していない	

7. 関宿内4区域における意匠の変容状況

7.1 出格子・平格子と玄関格子戸の変容状況

1980年時点における、伝建物中の出格子・平格子の取り付け割合を区域ごとに見ると、図8で示すように新所西では約48%（伝建物44件中21件）と最も高く、木崎、新所東、中町約19%（同75件中14件）の順に取り付け割合が低くなっていた。新所西や木崎は専用住宅が多く、店舗等への改修を行っている建造物も少ないことから、出格子・平格子の残存率が高くなったものと考えられる。一方1980年以降2017年までに、伝建物において復元された平格子・出格子の割合は、中町が約36%（伝建物75件中27件）と最も高かった一方で、新所西は約20%（伝建物44件中9件）と最も低くなっている。

次に玄関格子戸では、1980年時点に新所西で約34%（伝建物44件中15件）と取り付け割合が最も高い一方で、中町は約9%（同75件中7件）と最も低くなっており、平格子・出格子における取り付け割合の傾向とはほぼ同様であった。また復元された割合では、木崎が約54%（伝建物48件中26件）と高く、中町で約41%（同75件中31件）となる一方で、新所西では約32%（同44件中14件）と低くなっている。

7.2 腰板の変容状況

1980年時点での腰板取り付け割合は、図9の通り新所西で約59%（伝建物44件中26件）と最も高い一方、中町では約21%（同75件中16件）と最も低く、①の出格子・平格子と玄関格子戸の傾向と同様となっていた。また現在までに復元された腰板の割合では、中町が約31%（伝建物75件中23件）と最も高い一方で、新所西では約18%（伝建物44件中8件）と低くなっている。

今回調査を行った、出格子・平格子、玄関格子戸、腰板の4意匠は共に、1980年時点では新所西において取り付け割合が高い一方で、中町は割合が低くなっていたが、その後復元された割合では新所西が最も低く、中町では最も高くなっているなど、修理・修景前のそれぞれの区域の意匠の取り付け状況とその後の復元状況は大きく異なっている。

図8 出格子・平格子（左）と玄関格子戸（右）の1980年時点での取り付け割合と復元された割合（%）

図9 腰板の1980年時点での取り付け割合と腰板が復原された伝建物の割合（%）

8. 2つの場所的特性を有する意匠様式と変容状況

8.1 格子の様式における変容状況

8.1.1 2つの場所的特性を有する格子の様式

伝建物の修理により復原が多くなされた平格子や玄関格子戸⁽¹¹⁾において、修理・修景前には関宿内の区域ごとに多く取り付けられている意匠の様式が異なっている、「切子格子」「連子格子」の二種類（図10）に着目し、伝建物の修理における格子の様式の選択状況について分析を行った。2つの様式の違いとして、「切子格子」は「連子格子」の上部本数の一部が少なくなっている事が特徴である。

図10 連子格子（左）と切子格子（右）

図11 関宿で見られるさまざまな格子

8.1.2 各区域における格子の様式の変容状況

①平格子

図12で示すように1980年時点では、新所西や木崎において切子格子も一部見られた。しかし新所東や中町において、切子格子の取り付けは約10%以下（両区域とも1件以下）と連子格子がほとんどを占めていた。しかし修理により復原された平格子では、切子格子は全区域で約30~70%程度の復原がなされている。1980年時点では、連子格子がほとんどであった新所東や中町においても約30~60%の切子格子が復原されている。

②玄関格子戸

次に玄関格子戸は、図13のように1980年時点において、新所西の伝建物の約20%で切子格子が取り付けられていたが、それ以外の新所東、中町、木崎の3区域では、伝建物で切子格子が用いられていたのは、15%未満（3区域とも1件以下）とこれらの区域では連子格子がほとんどを占めていた。しかし復原された玄関格子戸の様式では、新所西以外の3区域においても約40~60%の伝建物で切子格子が復原されている。

このように平格子や玄関格子戸は修理による復原の中で画一的な意匠の様式が地区全体で多く選択されるようになっている。一部の区域でのみ見られた意匠様式は、現在では地区全体でみることが出来る様式へと変容している。

図12 平格子の1980年時点での取り付け状況（左）とその後復原された（右）各様式数

図13 玄関格子戸の1980年時点での取り付け状況（左）とその後復原された（右）各様式数

8.2 腰板の様式における変容状況

8.2.1 2つの場所的特性を有する腰板の様式

次に腰板の中でも、修理・修景前には関宿内の区域ごとに多く取り付けられている様式が異なっていた「たて張り」と「ささら子張り」の2種類(図14)に着目した。腰板も平格子や玄関格子戸と同様、痕跡調査等から意匠の現在までの有無や意匠の様式について、判断することは多くの場合難しい。

図14 たて張り(左)、ささら子張り(右)、

8.2.2 各区域における腰板の様式の変容状況

1980年時点での取り付け状況としては、図15の通り木崎や新所西ではたて張りが多く見られた一方、新所東ではささら子張りが多く、中町ではほぼ同程度となるなど、それぞれの区域で様式の傾向が異なっていた。

図15 腰板の1980年時点での取り付け状況(左)とその後復元された(右)各様式数⁽¹²⁾

図16 伝建物における腰板の変容状況

その後復元された腰板では、木崎や新所西、新所東でたて張り、中町ではささら子張りが多く復元されている。木崎や新所西では、修理・修景前におけるそれぞれの区域の様式の傾向がその後復元された様式と同様であった。しかし、新所東では復元された様式の多くが修理・修景前の傾向とは異なり、新所西や木崎などで多く用いられている様式による復元が多くなされていることがわかった。場所的特性への認識がされながらも1980年時点での取り付け状況とその後復元割合が異なる意匠様式が見られた要因として、第5章の図5における修理案の決定に至るプロセスの中で場所的特性を考慮した内容が実際の修理案としてあまり採用されなかったことなどが考えられる。

8.3 腰板・格子の様式における変容と場所的特性への認識

腰板の様式については、行政や業者等の専門性を有する関係者による場所的特性の認識があり、場所的特性を反映させた意匠様式による復元が多くされている地区も見られた。一方、修理・修景前には腰板と同様に場所的特性を有する意匠の様式が存在していた各格子(平格子や玄関格子戸等)では、関係者間での場所的特性への認識がほとんど確認出来ず、実際の修理による復元の状況についても地区内で画一的な選択がなされていた。平格子・玄関格子戸と腰板で多く復元された意匠様式が異なっていたように、行政や業者等の場所的特性への認識が、各意匠の様式を選択にも影響を与えたものと考えられる。

9. 結論

9.1 まとめ

以上、関宿を対象に区域分けを行った範囲内での場所的特性をもとに、場所的特性を有する意匠や意匠様式に着目し、その変容状況について分析を行った。その結果は以下のようにまとめられる。

①関宿では修理・修景前(1980年)、同一の地区内であっても建造物やその利用状況はそれぞれの区域で異なっていた。40年近く経過した現在でもこれらの違いは大きく変化していない。

②修理による意匠の復原を検討する際、痕跡調査や保存資料等から復原の有無や意匠様式等を判断することが難しい場合、行政や業者といった専門性を有した関係者だけでなく、施主も含めた話し合いによって内容を決定する。しかし専門性を有した関係者が場所的特性について考慮した修理案を提案しても、実際に工事を行う修理案については、施主が最終的な決定を行う。

③修理による意匠復原により、現在では過半数以上の意匠が修理・修景前には見られなかった意匠様式となっている区域もみられる。このように修理・修景前の区域ごとの意匠様式の傾向が大きく異なっていた場合でも、伝建地区の調査報告や保存計画等の中で、特性として具体的な記述がなされておらず、また行政や業者、施主間においても十分な認識が広がらないことは、地区内で一律的な意匠様式の選択が進む要因の一つと考えられる。

④③の一方で、伝建地区の調査報告や保存計画等においてそれぞれの区域の特性として具体的な記述がなくても、行政や業者らがこれらの特性について認識を持っていることで、施主らも含めた修理案の決定時に、意匠様式について制約等が無いにも関わらず、場所的特性を有した意匠の様式を多く選択する傾向にある区域がみられた。

9.2 考察

閑宿では修理・修景前、それぞれの区域ごとに多く取り付けられている意匠やその様式が異なっていたが、専門性を有する関係者の場所的特性への認識によって、復原される意匠の様式にも違いが見られた。特に地区内での場所的特性への認識がほとんどされていない場合、地区全体で画一的な意匠様式が多く選択される傾向にあることが明らかとなった。

すべての歴史的まちなみ景観の整備を行う地区において、実際の運用において地区内での場所的特性まで考慮されているわけではなく、同様の事例は各地で広がっているものと思われる。場所的特性を活かした整備を行うことを目指す地区では、区域分け範囲の検討とそれらを適切に運用するための制度設計を行うことが必要である。また制度設計の中で場所的特性について、行政や業者などの認識を高めるような仕組みづくりが今後必要であると考えられる。

【補注】

(1) 例として秋田県横手市増田では保存計画（平成29年8月28日変更）の中で、「保存地区の特性」として地区内の「表通り、側面及び路地通り、裏通りの町並み」について各特性を記述している。また兵庫県篠山市福住では保存計画（平成29年12月28日変更）において、「保存地区の特性」、「伝統的建造物群の特性」の中で、地区内の1つの字を「宿場町」、3つの字を「農村集落」として各特性について記述がされている。

(2) 閑宿の伝建地区保存対策調査報告や保存計画では、「保存地区を構成する区域」として、東海道沿いの13の町を4つの区域に分け、区域ごとに建造物やその意匠の状況、また町並の景観に関する特性や保存整備方針について記述している。調査報告では「新所の家々には前面に著しい改修を行ったものは少なく格子や庇の幕板などの伝統的な細部意匠は比較的に残る。中町の町家は比較的に立ちが高く、新所や木崎に較べて意匠的にはより華やか。木崎は一階前面に格子やガラス戸を入れた仕舞屋ふうの表構えも持ち、町並の建物の構成は新所とも共通するものである（一部、抜粋）」と記述され、各区域の意匠の特徴についても詳細に記述されている。

(3) 保存計画には「保存地区内における伝統的建造物群を構成している建造

物」を伝建物として特定していると記述されており、伝建物は一部税金の免除や修理時の補助金制度などを受けることが出来る。

(4) 空き地化や新築などを除いたデータ

(5) 本研究では、保存計画などに「建造物の構造」、「各部手法（屋根や各階壁面、庇など、建造物を構成している要素の名称）」として記載されている、格子や腰板などの建造物の構成要素を「意匠」と定義している。

(6) 亀山市では、伝建物の修理について「通常望見できる外観及び外観保存に付随する内部を原則として現状ないし復元的手法によって維持する」ことを、非伝建物の修景を「住民の協力を得て、可能な限り伝統的建造物と調和する」ことを示すと定義している。

(7) 本研究では意匠の中でも、具体的な種類、形状（平格子や玄関格子戸における連子格子や切子格子など）について「意匠の様式」と定義している。

(8) 本論文においては、「意匠の復原が確認された伝建物」とは、修理・修景事業前（1980年時点）には意匠の取り付けが確認できなかったが、現在（2017年時点）では意匠が取り付けられている伝建物を示す。

(9) 専門性を有した各関係者へのヒアリングでは、腰板について「区域ごとにたて張り、ささら子張りが多いといった（明確な）意匠様式の違いへの認識」がされているのではなく、「華やか」な腰板（主にささら子張りを示す）、「落ち着いた」腰板（主にたて張りを示す）が各区域で目立っている」などの認識が持たれていた。調査報告内（補注（2）を参照）においても、「中町の町家は新所や木崎に較べて意匠的にはより華やか。（一部、抜粋）」と各区域の意匠の特性について記述がされている。

(10) 各関係者へのヒアリングでは、格子について「地区内の主要な建造物における格子様式は把握しているものの、区域ごとの格子様式の違いは把握していない」との回答であったことから、腰板への認識状況と比較し「ほとんど把握（認識）されていないもの」と判断した。

(11) 各格子の中でも、出格子は1980年時点やその後復原された意匠様式のほとんどが「切子格子」であり、区域ごとの違いは見られないことから検討を行っていない。

(12) 図15の腰板の取り付け数また復原数のデータについては、伝建物1件につき複数の腰板様式が取り付け、復原されている事例等がみられることから、（1980年時点の）各区域の伝建物において取り付けられていた、また（1980年以降に）復原された腰板の実数で示している。

【参考文献】

- 1) 會田千春・岡崎篤行（2010）. 修理修景事業における基準の運用実態とオーセンティシティからみた課題：佐渡市宿根木重要伝統的建造物群保存地区を対象として、日本建築学会技術報告集, 16(32), 325-328.
- 2) 牛谷直子・増井正哉・上野邦一（2004）. 重要伝統的建造物群保存地区における現状変更に伴う景観変容に関する研究—檜川村奈良井重要伝統的建造物群保存地区を事例として—、日本建築学会計画系論文集, 69(582), 81-86.
- 3) 閑町（1981）. 『閑宿伝統的建造物群保存地区調査報告』
- 4) 亀山市市民文化部まちなみ文化財室（2015）. 『東海道五十三次閑宿重伝建選定30周年記念誌』, 32-60.